

見本

令和二年度

人文学部

推薦入試

小論文

注意事項

- 一 試験開始の合図があるまで、この表紙を開かないこと。
- 二 試験問題は二枚、解答用紙は二枚、下書き用紙は二枚である。
試験開始の合図があつてから確認すること。
なお、文字などの印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁、および汚れなどがあつた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 三 試験開始後に、解答用紙の指定欄に受験番号を算用数字で記入すること。
氏名を書いてはいけない。
- 四 解答はすべて解答用紙に記入すること。指定された解答用紙以外に記入した解答は、評価（採点）の対象としない。
- 五 配布された試験問題および下書き用紙は、試験終了後、持ち帰ること。

実施年月日
1.11.27
富山大学

次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

もう一昨年のことになるが、イギリスのオックスフォード辞典が、二〇一六年の「今年という言葉」として「ポスト真実 (Post-truth)」を選んだと聞いたときはいまだに忘れられない。三〇年近くにわたってテレビメディア、しかも報道番組に関わってきた者として、「ポスト真実」、つまり客観的な事実や真実よりも、感情的な訴えかけが多くの人に影響を与え、世論形成に大きなインパクトをもたらし始めているとの指摘は、まるでこれまでの自らの仕事を否定されたかのように思えるほどの衝撃を私に与えた。

すぐに私は、当時、日経新聞に連載していたエッセイで、こう書いた。

「ポスト真実という言葉の誕生は、真実を取るに足らないものと受け止める社会の広がりのようにも思え、ジャーナリズムにとつて深刻な事態だ」「真実を踏まえて人々は判断するというのが健全な民主主義だったはずなのでは」。いささか青臭い問いだと書きつつも、これが正直な思いだった。

ポスト真実の時代、それは人々が、真実よりも自分の感情に寄り添う情報のほうを信頼してしまう、自分が共感できることだけを信じるようになってしまふ時代だ。『確証バイアス』という言葉があるように、人は、自分があらかじめ共感できるものを裏付ける情報だけを重視する傾向がある。しかし、そういう情報だけを集めれば、自分のもとから持っていた考え方をより強固にし、それに反する意見には耳を傾けないどころか、排除してしまふことにつながる。

フェイスブックでつながった友達、ツイッターでフォローしている人々から送られる情報にばかりアクセスしていると、多様な情報に接しているつもりでも偏った情報、自分が共感しやすいものだけに接してしまいがちになる。こうしたなかで多様な人々の存在、自分とは異なる多様な考え方があることを知る機会が減っていく。それぞれが固有の情報空間のなかでの対話だけを行うようになり、人々の間に情報の分断、お互いの排除さえ起きてくる。いま、社会はその傾向を強めている。

一九九三年から二三年間、「クローズアップ現代」のキャスターを務めてきて、毎日が試行錯誤の連続だった。とはいえ、閉塞感があふれる社会のなかで、様々な社会的課題に対し、その解決に向けての議論の場を提供し、合意形成を促していくことが「クローズアップ現代」の存在意義だと思ってきた。(中略) 私が関わった「クローズアップ現代」に限らず、多くのジャーナリズムは、大なり小なり同じ役割を果たしてきたわけであり、ポスト真実の時代の到来により、これまでのメディアはその存在意義を問われているように思える。

もちろん、これまでのテレビの報道番組、そしてジャーナリズムが、取材によって積み重ねられた事実を媒介として、視聴者や読者とつねに安定した関係を築いてきたわけではない。昨年出版した自著『キャスターという仕事』(岩波新書)で紹介したように、アメリカ

カのジャーナリスト、デイビッド・ハルバースタムは、一九九三年の来日講演で、「視聴者は、すでに持っている偏見で違った習慣を持つ人たちを見ることを望んでいる。それは、偏見を取り除くために、より深く考えることよりも、既存の偏見を認めることのほうがはるかに楽だから」と語っている。視聴者は、あらかじめ自分が持っている感情を大事にし、たとえそれが偏見であろうと、その感情に訴えかけてくる情報に寄り添ったほうが「楽」なのだ。しかし、だからこそ、ジャーナリズムは存在しなければならぬとハルバースタムは二五年前に語っていた。感情的な訴えかけのほうの人々に影響を与えるからこそ、それに抗するように、ジャーナリズムは、人々がその偏見を乗り越えて、世界をありのままに見ることができ、より深い理解に至ることに役立たなければならぬのだ。

このことは、メディアに関わる者にとって自明だったはずであり、とりわけテレビメディアという、映像を主体とするメディアにとっては、感情に訴える要素が多いだけに、このことは重要だと私には思えた。(中略)

しかし、その思いとすれ違うように、ポスト真実の時代は到来した。メディアの視聴者や読者は、いまや「楽」であるからだけでなく、より積極的、能動的に、自らの感情や思いに沿ったものだけを、メディアが提供する情報のなかから選ぶようになったのだ。そして、そのことは、もう一歩進んで、自らの感情が一体化できる情報よりも多く提供してくれるメディアだけに接するようになる傾向をも示している。「情報をメディアから選択」するのではなく、「一体化できるメディアの選択へ」という変化が生まれつつあるように思える。

こうして、視聴者や読者、現在のメディアの受け手は、これまでメディアを通して得ていた、異質なものに触れる機会を失いつつある。

この背景になにがあるのか、明確な答えはない。しかし、この傾向が強まっていく社会に起こっていたのは、経済格差の拡大ひろがり、それがもたらす不公平感の高まりだ。そのことと、自らが共感できる、感情が一体化できる情報だけを取り込み、異質なものは排除していくというポスト真実の流れは、無縁とは思えない。むしろ経済格差の拡大によって進みつつある社会の分断は、情報空間の分断によって一層進んでいくことになるかもしれない。

(国谷裕子「ポスト真実時代のジャーナリズムの役割」『世界思想』通巻第四五号)

二〇一八年 世界思想社 一部改変)

問一 筆者はメディアと視聴者や読者との関係がどのように変わったと述べていますか。

二〇〇字以内で説明しなさい。

問二 筆者の主張に対して、あなたの考えを八〇〇字以内で述べなさい。

見本

下書き用紙（解答用紙ではありません）

